

## 家族で心にゆとりを

平成 19 年 1 月 15 日 (月曜日) 静岡新聞

### 「日本の歌百選」

- |          |            |            |            |               |
|----------|------------|------------|------------|---------------|
| ・ 仰げば尊し  | ・ 風 (草川信)  | ・ スキー      | ・ 浜千鳥      | ・ かもめの水兵さん    |
| ・ 埴生の宿   | ・ 赤い靴      | ・ 肩たたき     | ・ 背くらべ     | ・ 世界に一つだけの花   |
| ・ 赤とんぼ   | ・ からたちの花   | ・ ぞうさん     | ・ 春が来た     | ・ 川の流れるように    |
| ・ あの町この町 | ・ 早春賦      | ・ 春の小川     | ・ あめふり     | ・ 雨降りお月さん     |
| ・ ふじの山   | ・ 汽車       | ・ たきび      | ・ 汽車ポッポ    | ・ ちいさい秋見つけた   |
| ・ 冬景色    | ・ 茶摘み      | ・ 冬の星座     | ・ いい日旅立ち   | ・ あめふりくまのこ    |
| ・ 靴が鳴る   | ・ こいのぼり    | ・ チューリップ   | ・ 故郷       | ・ 今日の日はさようなら  |
| ・ いつでも夢を | ・ 月の砂漠     | ・ 牧場の朝     | ・ 浜辺の歌     | ・ おもちのチャチャチャ  |
| ・ 高校三年生  | ・ 翼をください   | ・ 荒城の月     | ・ 犬のおまわりさん | ・ 上を向いて歩こう    |
| ・ 通りゃんせ  | ・ 虫のこえ     | ・ 蛍の光      | ・ 秋桜       | ・ 見上げてごらん夜の星を |
| ・ この道    | ・ どこかで春が   | ・ 江戸子守歌    | ・ ドレミの歌    | ・ 手のひらを太陽に    |
| ・ 朝はどこから | ・ 村祭       | ・ さくら貝の歌   | ・ われは海の子   | ・ みかんの花咲く丘    |
| ・ さくらさくら | ・ めだかの学校   | ・ もみじ      | ・ 大きな古時計   | ・ むすんでひらいて    |
| ・ サツちゃん  | ・ ないしょ話    | ・ 椰子の実     | ・ おかあさん    | ・ うれしいひなまつり   |
| ・ 里の秋    | ・ 涙そうそう    | ・ リンゴの唄    | ・ お正月      | ・ こんにちは赤ちゃん   |
| ・ 夏の思い出  | ・ 夕やけこやけ   | ・ 叱られて     | ・ 夏は来ぬ     | ・ どんぐりころころ    |
| ・ 朧月夜    | ・ 四季の歌     | ・ 七つの子     | ・ 揺かごのうた   | ・ 大きな栗の木の下で   |
| ・ 時代     | ・ 花 (嘉納昌吉) | ・ 花 (滝廉太郎) | ・ 旅愁       | ・ とんぼのめがね     |
| ・ しゃぼん玉  | ・ 夕日       | ・ かあさんの歌   | ・ 雪        | ・ おうま         |
| ・ 花の街    | ・ おはなしゆびさん | ・ 思い出のアルバム | ・ 海        | ・ 幸せなら手をたたこう  |
|          |            |            |            | ・ ずいずいずっころばし  |

### 「日本の歌」 101 曲 文化庁選定

文化庁は 14 日、公募の中から選んだ「親子で歌いごう 日本の歌百選」を発表した。「さくらさくら」など古くから広く親しまれている曲や、2003 年に SMAP が歌いヒットした「世界に一つだけの花」(作詞作曲・槇原敬之) など、世代を問わずに口ずさめる曲が並んだ。

河合隼雄文化庁長官が「歌を通じて家族のきずなを確かめるきっかけに」と発案し、昨年 9～11 月に全国からはがきや電子メールなどで公募。計 6671 通、895 曲の中から歌手由紀さおりさんらが委員を務める選考委員会が検討の結果、名曲が多く、最終的に 101 曲を選んだ。

入選作には「お正月」「赤とんぼ」「めだかの学校」など童謡や民謡が目立つが、「いい日旅立ち」(作詞作曲・谷村新司)「上を向いて歩こう」(作詞・永六輔、作曲・故中村八大) など昭和のヒット曲も入った。

百選の一部は 14 日午後、都内で開催したコンサートでお披露目された。文化庁は近く入選作を楽曲集として冊子にまとめる方針。

## 日本の心をわが子に伝えよう

知ってる知ってる、あの歌この歌。幼稚園で歌った。学校で教わった…。お母さんも歌ってた。おばあちゃんも歌ってた…。この歌を聞くと、遠い昔の母の顔が浮かんでくる。この歌を聞くと、子どもの頃が思い出される。それは、童謡であったり、唱歌であったり、はたまた民謡であったり、歌謡曲であったり…。

文化庁長官は、「歌を通じて家族のきずなを確かめるきっかけに」とおっしゃった。このことは、長官が、地域の連帯性、地域の心の通い合いの希薄化は、いまや家族の中にまで浸透してきているととらえていることを意味します。いわゆる家族間のつながりの弱さに対する危機感の表れです。

高度経済成長がもたらした生活様式、行動様式の大変化。その変化に輪をかけるような通信手段、通信機器の革命的発達。人々は、生の顔を突き合わせることに、生の声で言葉を交わすことの減少を余儀なくされました。「日本の歌 101 曲」は、そんな私たちに心のゆとりを取り戻させてくれます。ぜひともわが子に歌いついでいきたいものですね。

(平成 19 年 2 月)

## 人形に対する心、まなざし

灯りをつけましょぼんぼりに お花をあげましょ桃の花  
五人ばやしの笛太鼓 今日のはたのしいひな祭り

今日も、子どもたちの歌声が園内に響きます。春の訪れを知らせるこの歌、「うれしいひなまつり」。私は男ですが、子どものころからこの歌が大好きでした。今でもこの歌を聞くと、明るさを増した春の日差しが降り注ぐ故郷の家の縁側が目に見えられます。庭先には、確かに桃の花もありました。奥の部屋には、古びた、それこそ陶器のお雛様が飾ってありました。菱餅や雛あられ用の餅つきもしました。その雛あられは毎日祖母に煎ってもらい、その後1ヵ月にも及ぶうれしいおやつとなりました。

私が子どものころは、車もほとんどなく、もちろん石油ストーブやエアコンなどはありませんでしたから、暖をとるといえば火鉢ぐらいで、夕げ時ともなれば、かまど周辺が格好の居場所となりました。子どもは風の子と言われますが、その子どもの私ですら日暮れ時の寒さには勝てず、ぬくもりを求めてかまどのそばへ寄っていったものでした。そのころの冬の寒さは今とは比べ物にならないくらい厳しく、家の北側に置いた水桶の氷など、終日溶けることなく、そのまま次の夜を迎えてしまうというありさまでした。ですから、「うれしいひなまつり」の3番にある「金の屏風に映る灯をかすかに揺する春の風」という一説がことのほか心に響いて忘れ難く、春近しのうれしさになつかしさも加わって、今でも一瞬にして私を遠い昔にタイムスリップさせるのです。加えて短調の調べが、一層の郷愁を誘います。

ところで、ひな祭りといえば、主役は何といってもお雛様。私たちは、大事にしまっておいた雛人形を取り出し、飾ります。1年ぶりにお目見えした雛人形は、今年もまた私たちに、そして、再会を待っていた子どもたちに、変わらぬ微笑みを投げ掛けます。

雛人形の取り出しを見つめる子どもたちのまなざしは、取り出しているお母さんたちのそれと同じように、一様に優しげです。そして、人形を手にならせてもらえたときなど、必ずといっていいほどにっこり目になって、人形の目を見つめます。

子どもたちは、お雛様が大好きです。いや、お雛様に限らず、人形が大好きです。人形遊びなど始めれば、「さあ、〇〇ちゃん、いい子ね。お洋服着替えましょうね。」「〇〇ちゃん、ご飯ですよ。いっぱい食べましょうね。」などと、もうまるでお母さんです。掛ける言葉も、まさに愛情のかたまりです。養育義務や育児責任などが云々されるような世の中ですが、子どもたちの言葉は、そのような世界とは無縁です。喜びと自信と主体性が満ちあふれた慈しみの世界の言葉です。見れば、手つきも様になっています。子どもたちがついこの前まで母や祖母から受けた扱いです。それがそっくりこの人形たちに授けられています。もちろん、一つ一つの手の動きに、母や祖母から受けた愛情をそのまま託しながら。

この愛情の投げ掛けは、ぬいぐるみに対しても同じです。優しげな子犬や子猫などのぬいぐるみにそっとほほを寄せるしぐさは、基本的には先の人形に対するそれと同質です。この子たちに、動物虐待や子ども虐待など起こるはずはありません。

子どもは親の背を見て育ちます。たとえ人形であろうとぬいぐるみであろうと、その扱いが命ある人の子、犬の子に対するそれと同じであれば、子どもたちは、人形遊び、ぬいぐるみ遊びを通して、自ら命を大切にすることを学びます。

## 幼稚園教育について理解を深めよう

4月になりました。精華幼稚園は、園児と保護者の皆様の夢を乗せて、また新たな出発を始めます。この船出は、保護者の皆様にとって、いうなれば「子育て航海」への出発です。みなさんに乗せた精華幼稚園丸は、実り多い船旅を期してエンジンを全開します。

航海には、地図と羅針盤が欠かせません。私たちは、その地図になり、羅針盤になって、皆様の航海を支えます。

今年1枚目の地図は、これから目指す幼稚園という大海原の紹介図です。幼稚園ってこういうところなんだ、幼稚園教育ってこういう教育なんだと、理解の深まりを期待します。

幼稚園は保育園とは違って文部科学省の管轄下に置かれています。(保育園の統括元は、厚生労働省)そして、小・中・高等学校が学習指導要領によって教育内容を決定付けられているように、幼稚園も、文部科学大臣が告示した幼稚園教育要領によって教育内容が方向付けられています。

教育要領は、幼稚園の教育領域を5つに分けて示しています。①心身の健康に関する領域「健康」、②人とのかかわりに関する領域「人間関係」、③身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、④言葉の獲得に関する領域「言葉」、⑤感性と表現に関する領域「表現」の5つです。

学びの方法は遊びです。保育者は、遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を展開していきます。

### ＜各領域の総括目標＞

【健康】…………健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。

【人間関係】…人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。

【環境】…………自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。

【言語】…………日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。

【表現】…………多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。

各領域の目標は、概して抽象的です。そこで、精華幼稚園では、これらのねらいを具体的な子ども像として設定し直します。①自由遊びができる子に、②集団遊びができる子に、③園行事に楽しく参加する子に、④自分のことは自分でやれる子に、⑤美しく挨拶できる子に、⑥楽しくお話できる子に、⑦好奇心や探究心を抱く子に、⑧話を聞くときには、きちんと話を聞ける子に――。そして、それらを総合した姿が、精華幼稚園教育目標の「ひとり立ちする子」となるのです。

先述したように、子どもたちの学びの方法は遊びです。言い換えれば、遊びは学習です。ですから、学びはすべて五感を通します。体を通します。五感を通し体を通した学び、これはいうまでもなく体験です。つまり、体験は学びの最良の手段なのです。

精華幼稚園は、体験重視の幼稚園です。体験の広がりや密度の濃さが確かな学びと確かな育ちをもたらすという信念に基づいて、日々の保育に体験を位置づけます。お部屋で、お庭で、群れて遊んでどろんこになって、それでも飽き足りなくて、鷹匠・駿府・清水降園に出かけます。行く道々も体験です。行った先も体験です。自然と社会の両体験を積んで、子どもたちは日々成長を続けます。

(平成19年4月)

## 精華幼稚園についての理解を深めよう

「賢い親になろう」と題しながら、先月号と今月号は、幼稚園教育並びに精華幼稚園の教育（保育）方針についての説明です。幼児教育について正面から説明するため少し堅苦しさをお感じになられるかもしれませんが、3・4・5歳の子育てにおける大事な部分ですので、これも賢い親になるための学びとして、理解を深めていただけたらと思います。

私たちは保育の充実に努め、子どもたちが朝目が覚めたら行きたくなる幼稚園づくり、保護者の皆様がわが子の育ちに喜びを抱ける幼稚園づくりを進めています。3・4・5歳時は、心も体もこれからの土台をつくる大事な時期です。その大事な時期だからこそ、一年一年をきちんと見通した意味ある保育を重ねていきます。

### 【静岡精華幼稚園の保育】

#### 1 精華幼稚園が目指す幼稚園

- ① 園全体が、明るく温かな空気で包まれている。
- ② 園全体が、生き生きとした空気で包まれている。
- ③ 子どもたちの笑顔があふれている。嬉々とした声がこだましている。
- ④ 職員の笑顔があふれている。話し呼びかける声がこだましている。
- ⑤ 教師が子どもに寄り添っている。教師と子どもたちが群れて遊んでいる。
- ⑥ セキュリティは万全だが、心の窓は開けっぴろげている。

◎ これまでに形成されてきている本園のよさを本園経営の原点として、すべての保育の基盤に据える。

#### ＜精華幼稚園のよさ＞

朝、子どもを抱き上げる先生がいる。

- 1 どの先生も、保護者より、子どもより先に、明るい声であいさつする。
- 2 どの先生も、すべての園児に名前呼びかけ、子どもの思いをこたまで返し広げる。  
(保護者も、園児も、先生も、安心と信頼の絆で結ばれる)
- 3 どの先生も、子どもと保護者を出迎え、寄り添い、居場所をつくる。
- 4 園庭はすべてが砂場である。(安全で、創造と発見のある環境)
- 5 園外にも積極的に出かけ、社会体験、自然体験の幅を広げる。(五感と感性を育てる)
- 6 行事は、先生と共に子どもが考え、子どもが創る。

帰り、子どもを抱きしめ、子どもの目を見、子どもの心を見る先生がいる。

## 2 精華幼稚園が目指す子ども



- 幼稚園は遊びが活動であり、その活動が即学びですから、内容は小学校や中学校のように分化されてはいません。もちろん、国語や算数・数学といった教科学習など全くありません。
- 幼稚園の内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言語」「表現」の五つからなっています。これを五領域といいます。しかし、それらには目に見えるような境界線はなく、五つの中身は互いに関連し合い重なり合っています。
- 私たちは、その中身を「願い」「込める思い」と受けとめ、五領域の内容を洗い出します。(上図参照)すると、込める思いは5つほどに集約されてきます。「基本的な生活習慣」「人を受けとめられる受容性」「積極性の元となる主体性」「感性の豊かさ」「周囲の物事への興味関心」の5つです。
- 5つはさらに集約されます。子どもの動きを想定しながらまとめてみると、生活という観点から「生活の基本をつくる」、遊びという観点から「遊びを生み、広げ、深める」、かかわりという観点から「友達と一緒に楽しむ」とまとめられます。
- それを育てたい子どもの姿として表してみますと、生活面では「自分の力でやろうとする子」、遊び面では「夢中になって遊ぶ子」、かかわり面では「仲良く遊ぶ子」となります。これが、私たち精華幼稚園で目指す子ども像です。

○ 子どもたちは、一人一人みんな違います。私たちは、一人一人をよく見つめ、その子なりの目指す子ども像への迫りを後押ししていきます。

### 3 「育てたい子ども像」に迫る——教師（保育者）の営み

#### (1) 自由遊びができる子に

- ・ 自分でやりたい遊びを自由に選んで遊べるよう、保育者は寄り添って遊びの世界に誘います。
- ・ 一人遊びが苦手な子には、保育者が寄り添い、一緒に腰を下ろして二人で遊びを始めます。

#### (2) 集団遊びができる子に

- ・ 保育者は、手を携えながら、グループや学級のみなどと一緒に遊ぶことの楽しさを味わわせます。
- ・ 集団遊びが苦手な子には、保育者が寄り添い、その子の歩みにあわせてゆっくりと世界を広げていきます。

#### (3) 園行事に楽しく参加する子に

- ・ 日々の保育を生かし発展させた園行事を用意します。
- ・ 「主役は子ども」の考えの下、子ども自らが考え、進んで参加できるようにしています。

#### (4) 自分のことは自分でやれる子に

- ・ 朝と帰りの着替えは、子ども自身の大事な仕事。徐々に自分の力でできるようにしていきます。
- ・ 楽しく遊んだ後の片付けも、子ども自身の大事な仕事。時間をかけても自分の力でできるようにしていきます。

#### (5) 美しくあいさつできる子に

- ・ 保育者が心を込めて声をかけ、あいさつの響きの心地よさを知らせます。
- ・ 朝、昼、帰り、機会あるごとに繰り返し、あいさつの習慣を身に付けます。
- ・ 「お茶っ子」「剣道」「英語あそび」で、礼儀を正しく身に付けます。

#### (6) 美しくお話しできる子に

- ・ 保育者は、日々言葉を大切にしながら、子どもの立場に立って分かりやすく話します。
- ・ 保育者は、子どもの言葉をゆっくりゆったりと受けとめ、子どもの思いを汲み取ります。
- ・ 保育者は、自分が話したことを分かってくれたときの子どもの喜びに共感します。

#### (7) 好奇心や探究心を抱く子に

- ・ 「知りたい」「分かってほしい」「やってみよう」は、子どもが持つ本来願望。好奇心、探究心をくすぐるために、絵本の読み聞かせを積極的に行います。園外保育で、社会と自然の体験の幅を広げます。
- ・ ブロックあそびや造形あそび、お砂あそびにクッキング。五官をフル活用して五感を伸ばします。

#### (8) 話を聞くときにはきちんと話を聞ける子に

- ・ 聞いて知る、聞いて分かる、聞いて考える——「聞く」はすべての学び、すべての育ちの出発点。さらには思いやりの心の原点ととらえ、全園挙げて聞く態度・聞き取る力の育成に取り

組んでいます。

子どもたちは、入園前の3年間、母親を中心とした大人たちによって一步一步認知を深め、行動の幅を広げてきています。精華幼稚園はその基礎の上に、自分の力でやってみる楽しさ、自分の力で成し遂げる喜びを積み上げます。楽しさ、喜びを自分の手でつかんだ子どもたちは、新たな意欲を沸き立たせ、行動を持続発展させるエネルギーを蓄積します。

幼児の行動は遊びであり、遊びは幼児の学びです。楽しさ、喜びを知った子どもたちは、さらにその楽しさ、喜びを広げようとして、遊びを発展させていきます。より広く、より深く、友達と一緒にその楽しさ、喜びを共有します。

子どもたちは夢中になって遊び込みます。そして、さらに考えます。「もっとこうしよう」「もっとあもしろ」と。

子どもたちは、自分のやりたいことが見えています。自分のやることが分かっています。1年前お母さんにくっついて泣いていた子が、今日は自分で着替えて園庭に飛び出していきます。1年の間に、子どもたちはいくつもの場を踏み、いくつもの経験を重ねてきました。その積み重ねが、子どもたちをして「独り立ち」へと歩ませます。

(平成19年5月)

## 形（型）が先か，理屈が先か

「履物を脱いで上がるときはね，後ろ向きになって脱がないんだよ。お部屋の方を向いたまま脱いで上がって，上がった後で後ろ向きになって，手で履物の向きを変えて揃えるんだよ。」

「座る（正座）ときは，膝と膝の間にこぶしが一つ入るくらい膝を軽く離して，両手は指を揃えて腿の上に置くんだよ。お辞儀をするときは，その両手を膝のほうにすべらせて，膝の前の畳の上に「ハ」の字を作るようについて，頭を下げるんだよ。さあ，やってみよう。」

「あれ，さっきたくさん咲いていたポーチュラカの花がなくなっている。」

「あら，ほんと。さっきまで咲いていたのに，茎ごとなくなってる。」

「園長先生，見てえ。ほら，お花のお山。」

子どもの声に振り向けば，お砂場でお山作りに興じる子どもたち。子どもたちの真ん中には，ひと目で協力度が見て取れる大きなお山。そのお山のとっぺんにはポーチュラカの花が数本束になって……。ポーチュラカは，一昨日花壇に挿し芽をしたばかりなのに，その何本かは，今日もう花を咲かせていたのです。もちろん，根はまだ出ていません。その花をつけた挿し芽を集めてお山に飾った年少さん。

「ありゃあ，まいった。こいつはまいった。まいった。まいった。あははははは。」

二つの場面を取り出してみました。先の場面は，「お茶っ子」の一コマです。「お茶っ子」の黒石先生が，年長さん相手に説明します。子どもたちは，神妙な面持ちで聞き受けます。誰一人，「どうして。」などとは問いません。先生の指示に無条件に従います。

二つ目の場面は，ある程度思い浮べることができるでしょう。お砂場近くの，そうですね，滑り台の横あたりでの私と谷澤先生のやりとりです。私も谷澤先生も，お花が消えた理由を知って，びっくりするやら吹き出すやら。「そうか，赤組さんたちは，このお花をとることに何のためらいも抱かなかったんだ。赤組さんたちにとっては，このお花はお山を飾る格好の品だったんだ。」瞬間，私たちはそう気付いたのです。と同時に，一生懸命飾った子どもたちがいとおしく思えてきました。これから根付くまで待つてもらうにはどんなふうに説明しようか。どう言ったら花壇のお花を花壇の中で楽しんでくれるだろうか。私は真剣に考えました。

子どもたちは，試行錯誤の中で学びます。試行錯誤の中で新たな世界を知り，対応の仕方や対処の仕方を見つけていきます。そしてまた，これまで知らなかった意味やわけを教わります。しかし，時には，意味やわけも分からぬまま，動きそのものを教えられることもあります。それが作法の指導であり，いわゆる形（型）から入る学びです。もちろん，その形には，それぞれそれなりの意味，わけ，理屈は具わっています。

世の中には，理屈は二の次，まずは形から，と指導され，伝授されるものがいくつもあります。武道，華道，茶道等々。神事，仏事もこの類です。テーブルマナーや挨拶も，いふなればこの範疇（はんちゆう）に入るでしょう。

子どもたちには，形から入る指導も必要です。「履物はきちんとそろえましょう。」「手を合わせて『いただきます』を言いましょう。」など，まさに理屈は二の次です。理屈は後からついてきます。形を極めて意味を知る——私たち大人も，子どもたちと一緒に歩みながら，もう一度学び直す必要のある形（型）がたくさんありそうです。